

## 「図書館」に対する社会意識の探索 - 朝日新聞の内容分析から -

鈴木 美識

「図書館」の語ひとつとっても、人々により連想する主題・単語は多岐にわたる。各図書館においてサービス利用状況や感じる雰囲気、求めるサービスの調査が実施されているが、それは当該図書館に対する意見の収集である。また、文学作品や漫画の中で「図書館員」や「図書館」がどのように捉えられているのかを分析した研究や、公共図書館とその類似施設としての書店のイメージについて調査した研究もあるが、それらは限定的である。また近年各図書館において新しい取り組みを実施しており、従来のイメージと新しいイメージとの両方が利用者の中に存在しているであろうことも指摘されている。ここでいう「新しいイメージ」とは、利用者の居住地域にある図書館に限らないため、対象図書館を限定せずにはかる必要がある。

そこで、本研究では、現代において一般の人々が、「図書館」の語そのものに対してどのように捉え、どのような事柄を連想するのかをはかることを目的として、新聞記事の内容分析を行った。新聞記事の分析を用いた理由は、まとまったデータが得られやすく、目的の語に関する話題をある程度文章の整理された自由回答の形で抽出できるため、対象を限定しない形で社会意識を探索することが可能だとされているからである。

具体的には、2013年の朝日新聞東京本社発行記事の内、見出し・本文に「図書館」の語を含む記事 393 件の見出し・本文・掲載面・文字数を抽出した。見出しと本文の分析には KH coder を用い、100 回以上出現した名詞 60 語に対して階層的クラスタ分析をかけた。

掲載面の分析から、大きな話題となる総合面の見出しに「図書館」の語が入る記事よりも、別の話題の中で本文に「図書館」が用いられる記事の方が比較的多いことが分かった。また、見出しに「図書館」を含む記事の平均文字数が、見出しのない本文に「図書館」を含む記事の文字数よりも少なかったことから、「図書館」そのものとしては大きく取り上げられにくいと考えられる。

クラスタ分析の結果、13 のクラスタが抽出された。「多様な資料を提供・保存する場所としての図書館」「学習機能と結びついた図書館」というように、それぞれ「図書館をどのように描写しているか」という観点からラベル付けをすることができた。全体的な傾向として、図書館は「資料を保存していて、(市民が)利用できる場所」として語られている。記事によって、どのように利用できるかという観点(より具体的には、「無料で利用」「大量の(貴重な)資料を利用」「自由に利用」のいずれか)が強調される傾向にある。ただし、「図書館」が主題となっている記事は、そのほとんどがデジタル環境下における図書館の存在や今後の方向性を論じるものであった。全体的に、取り上げられ方はそれほど大きくないが、図書館は人々にとって身近なものとして、ポジティブに語られる傾向にある。

(指導教員 松林麻実子)